

「名前を覚えていてくれただけで満足よ」あの時の私には全く母が理解出来なかった。

母は絵に描いたような、いわゆる『優しい人』である。母の口癖が「困っている人を見ると放っておけない」であることから分かるほど、人の為に何かをするのが好きだ。例えば、妻を亡くしたおじさんの家に毎晩夕飯を届けた。その分夕飯のカレーが足りなくなっても、母だけ何も食べなかったりもした。例えば、貧しくて月謝が払えなくなった教室の生徒に対して、その子が辞めるまで無料で教えていた時もあった。挙げだしたら切りが無い。

だが中でも一つだけ、そこまではるかと思っただことがある。介護だ。母は何と遠い親戚の介護を長年続けた。それも近くならまだしも他県に住むおばちゃんであった。おばちゃんの子供は遠くに住んでおり長い間帰ってくることもなく、いつも一人だった。そんな中、話を聞いた母は直ぐに会いに行き、月2回から月3回そしてしまいには週1で通うようになったのだ。再度言うが親子ではない。だが掃除にお風呂、買い物にと生活全般の面倒を看た。やがて高齢に伴い普通の生活が難しいことから施設に入ることになるが、入ってからも毎週会いに行った。認知症が発症し、暴言を吐かれ家で涙を流していた時もあったが、次の週にはまた施設に出向いていた。おばちゃんが蜜柑とチョコレートが好きだと知れば、例え高くても沢山買って持って行った。だが月日が経つごとにおばちゃんの食べる量は減り、しまいには食べる事が出来ず点滴のみとなった。しかしそれでも母は諦めなかった。噛む力が無いならとチューブに入ったチョコレートを見つけて持っていき、口元に塗ってあげたり、蜜柑を絞って口に含ませたりまでした。でも命の期限は刻々と迫り、ついにその日が訪れた。

朝6時頃、一本の電話がかかってきた。母は電話を持ち、その場にしゃがみこんだ。そして大声で泣き出した。

初めて見る母の涙だった。

葬式も終わり帰宅した母に私は言った。「何も貰えないのに良くやったね」と。すると意外な答えが返ってきた。

「おばちゃんは最後まで名前を覚えてくれた。それが最高の報酬よ」今だから分かる。認知症が進むと名前も分からなくなるそうだ。つまり母がどれほど献身的に介護したのかが読み取れる。

母もいつかは介護を必要とするときが来る。私は最後まで母を見て、名前を覚えて貰うことが人生の目標だ。